

紹介

恵美須・大黒の舞

— 蒲江王子神社の神楽 —

蒲江町蒲江浦

会員 西 元 由 雄

この神楽は、蒲江浦の王子神社で奉納される、神楽十  
二番のうち、九番目に舞われるものである。毎年一月十  
日と九月十日のいわゆる十日戎と、春の例大祭の四月三  
日、四日に、神前に奉納されている。神楽奉仕員は、舞  
人三人（一人は恵美須、一人は大黒）、太鼓一人、小  
太鼓・横笛・チヤンカラは一人乃至二人づつ、時によつ  
て人数がふえることがある。

この恵美須・大黒舞の起原については、王子神社の足  
田社家の「当浦日記」によると、宝暦四成年（一七五四）四月  
に「御鳥居一字奉納」と記されているが、その当時の恵  
美須神社は西之崎の、今保育所のあるあたりにあった。  
しかし海が近く、台風被害を度々受けたので、向浜の  
今の竹田屋旅館横のあたりに移した。それは安永二年  
（一七七十月）であり、盛大な海上渡御で御遷宮が行なわれ  
たとあり、この時はじめこの神楽が奉納されたものが、  
それ以前から舞われていたものか、つまびらかでない。

恵美須（事代主命）と大黒（大國主命）は、七福神の  
なかでも最も庶民に知られており、恵美須は漁の神とし  
て、大黒は商売繁昌、五穀豊饒の神として、二神一対の神  
として広く尊崇されてゐる。

神楽は、恵美須は烏帽子をかぶり恵美須面をつけ、袴  
衣に白袴をはく。大黒は福頭中に面をつけ、恵美須と同  
じ装束である。舞初めは二神共右手に鈴、左手に御幣を  
もち、梁器に合せて五方（東西南北中央）に向つておごそ  
かに舞う。

それから恵美須は持物を釣竿にかえ、大黒は空槌を持  
つ。この時からはやしが早く勇ましくなり、大黒が笑顔  
をふりまいて踊るように舞う。つきに恵美須が釣りま初  
める。餌をとられたり、岩に針をかけたたり、釣りそこな  
つて尻もちをついたりするが、ようやく大鯛を釣上げ脇  
の下にたきかかえる

二神は歡喜にみちた仕舞を表し、つつ舞い納める。

（付）

大正の末頃まで、正月をまじとして「恵美須様まわし」が、浦々々  
おこされた。恵美須の人形は鈴と御幣を拵たせ、次のような  
文句をうたいながら、巧みに人形をおやつて門付けをし、金  
品を受けていました。その「恵美須まわし」の文句を書きまし  
ょう。

舞いこんだ舞いこんだ、蛭子三郎左衛門の巫。生まれ  
月日はいつぞと胡えば、正月十日は寅の一天まだらの刻  
にやすやすと誕生なされた。蛭子様は生まれつきから漁  
師が存きで、沖をながめりや大鯛小鯛が、地んこしやん  
こはわる。これを釣らんとお船をこぎ出した。こぎ出し  
た。金の釣竿、錦の糸に、ゆうべ生まれたエビの子さし  
て、沖のとなかにとんぶりことつけたら、がへぶりしよ  
と喰いついた。これを釣らねばお船につんで、浜の御殿  
にお帰りなさる。これを肴に七福神が酒盛りなさる。飲  
めや大里歌えよ蛭子、命天様のお酌にて、一杯二杯が重  
なれば、目もとちらちら、足もとがっくりしよ、がっく  
りしよ。蛭子大黒敬もう家は、沖日大漁薩満作、ご家内  
安全商売ご繁昌、あちら目出度いな、目出度いな。（終）